令 和 6 年 2 月

大学院文学研究科

李　生智　提出　学位申請論文
「中国青海省の漢民族の葬礼を
めぐる民俗学的研究」
審査報告書

國　學　院　大　學

李　生智　提出　学位申請論文（課程博士）

「中国青海省の漢民族の葬礼をめぐる民俗学的研究」審査要旨

論文の内容の要旨

李生智の学位申請論文「中国青海省の漢民族の葬礼をめぐる民俗学的研究」は、青海省東部に位置する河湟地方と呼ばれる西寧市湟中区（湟中県）李家山鎮新添堡村、河湾村など、山峡に立地する漢族農村における葬礼習俗に関する研究である。西寧市は青海省の省都であり、研究地域の李家山鎮などは、その市轄区である。西寧市には漢族のほか、チベット族、モンゴル族、回族などが居住し、湟中区にはチベット仏教のクンブム・チャムパーリン寺もある。

現在、中国政府は土葬から火葬へ、葬礼の簡素化などの殯葬改革を進め、青海省人民政府もこの改革を行い、西寧市の都市部では葬礼・葬法は大きく変容しているが、郊外農村部の漢族は、文化大革命後に復活した旧来習俗に従って、生前から葬礼の準備を進め、葬儀は自宅で行い、遺体は宗族の墓地である祖墳に土葬している。本論文は、現在、継承されているこうした旧来の葬礼習俗の実相を実地調査によって明らかにするとともに、その継承の因子がどこにあるのかなどの分析を目的としている。

論文は、序章「先行研究と問題点の所在」、第１章「青海省の漢民族の葬礼と関与者」、第２章「村落と党家と葬礼」、第３章「理想的な葬

礼と三種類の死者」、第４章「葬礼と宗教的職能者」、第５章「青海省の漢民族の婚礼」、第６章「葬礼と喪服」、第７章「葬礼と贈答習俗－「寿礼」と「香奠」」からなる。

序章「先行研究と問題点の所在」では、本論文の課題、目的として、①青海省河湟地方の漢族農村における葬礼習俗の実態記録、②漢族農村における葬礼習俗の社会的意味と死生観などの検討、③河湟地方における葬礼の動態的変遷の三点をあげる。その上で、中国漢族の葬礼習俗に関する先行研究として渡邊欣雄、何彬、田村和彦などの研究をあげて、青海省漢族の葬礼研究については手つかずの状況にあるとする。

第１章では、西寧市湟中区李家山鎮新添堡村のある故人の葬礼について、葬礼の実施者と関与者、生前の準備から死後の四日間にわたる葬礼の手順と諸儀礼、五日目の埋葬、埋葬後の死者祭祀という、その全容を参与調査と聞き書きによって記述する。このなかでは、葬礼の実施者と関与者は、故人の家族、党家（宗族）、親戚（姻戚）、荘員（村人）、宗教的･技能的職能者の五者がいて、それぞれの動向と役割などを整理し、明確にする。

故人の家族は、その規模の決定と資金提供を行い、孝子･孝孫･孝媳･孝孫媳として葬儀に参加する。遺体の両側に跪くなど、最後の親への孝行を尽くすことが中心となる。葬礼運営の取りまとめ役である喪主は、同じ集落居住者である荘員から選ばれ、最高統括者として埋葬までを行う。葬礼には、母方の親族である「骨主」による「験孝」という死体検分などの儀礼があり、喪主はその調整役ともなる。「験孝」は、故人の

家族が親孝行であったかどうかを判断する儀礼で、家族は会話してはいけないという禁忌があり、骨主の質問に対して喪主は家族に代わって回答する。

葬礼実務は、喪主のもとで宗族である「党家」から構成される「東家」が行う。党家の各家は東家として労働力を提供するのであり、東家のなかから、そのリーダーとして「大東」が決められ、大東が東家各人に役割を割り振る。この東家は「請亡」「送亡」「験孝」などの儀礼に故人家族と一緒に参加する。

葬家と姻戚関係にある親戚は、上位、平等、下位の三種に区分され、この区分によって葬礼への関与と弔問・香奠のあり方が異なっている。上位親戚というのは、女性死者の実家、男性死者の母親の実家で、葬礼では「骨主」となる。骨主は死因、遺体の状態と故人が納棺時に着せられる「寿衣」の検分、家族による故人への生前の待遇などを家族に詢問する役である。故人の実の姉妹の嫁ぎ先の家々は平等親戚で、この家々は弔問に訪れ、「験孝」の儀礼に立ち会う。故人の娘と故人の家から婚出した女性の家は下位親戚で、多額の香奠を出し、故人の家族とともに遺体周辺に跪く。

葬礼には湟中区では道教、儒教、チベット仏教の宗教者が関与し、各宗教の作法で儀礼を行う。また、職能者として、唢呐匠と料理人が葬礼の進行と運営に役割を果たす。これら宗教者と職能者は、葬家の依頼による雇用関係による関与者である。

故人と同じ村落に居住する荘員は、喪主以外は葬礼の運営には関与し

ないが、弔問には各家の代表が訪れる。また、荘員は故人の「験孝」儀礼に居合わせることもあり、埋葬には、喪主の指示に従って青壮年男性が東家に協力して手伝う。

この章では「骨主」について考察を加え、葬礼の「験孝」を経ることで故人財産の相続権が家族に認められる。故人の財産には、女性の場合には婚家に嫁ぐ際に実家から持参した「嫁妝」（金銭と品物）があり、この嫁妝は、たとえば後継者の不在で嫁いだ娘が婚家の祖先として承認されない場合には、「験孝」において「骨主」が実家への返還を求めたり、婚出後に娘夫婦が築き上げた財産における娘の持分に対する所有権を主張したりする。「骨主」は、葬礼だけでなく婚礼にも存在し、離婚の場合は、骨主が娘に分与されるべき財産を主張し、実家に戻る娘がそれを受け取ることができるように計らう。嫁いだ娘の出産後には、見舞いに行って産婦と新生児の状態を確認し、婚家が適切な対応をしているかどうかの判断、さらに、嫁ぎ先夫婦の分家に際しては、財産分与の場に立会い、その内容が妥当かどうかを見るなど、財産の取り扱いにも関与することを明らかにする。

第２章「村落と党家と葬礼」では、旧来の葬礼と土葬の習俗が持続する因子には、葬礼運営を行う東家となる党家の存在があることを、湟中区李家山鎮河湾村の党家組織から検討する。この村は河湾と楊家庄の二集落からなり、村全体としては金山聖母廟、山神廟などを祀り、春節には「社火」の祭りが行われるが、河湾集落の大半は李姓、楊家庄の大半は楊姓の宗族によって成り立っている。河湾村としての村落祭祀がある

が、住民の互助共同等には宗族である党家が不可欠となっていることを、血縁による党家以外に、血縁ではなく、結盟にもとづく党家があることから示す。

党家の相互扶助は生産活動や葬礼などに存在し、結盟党家は、規模の小さい党家が結盟して相互扶助を行い、集団を維持している。一方、血縁党家は規模が大きくなると内部に複数の「門」を形成し、この門が共同の祖墳をもち、族譜を編纂している。後者の例として河湾集落の李氏一族を取り上げ、その七十三戸は、里院、東房、上院など六つの門に分かれ、門による族譜編纂や葬礼における東家は、単独の門による場合と複数の門が共同する場合があることを明らかにし、各家は党家・門への所属意識を強く持つとする。

第3章「理想的な葬礼と三種類の死者」では、西寧市湟中区李家山鎮の漢族農村での調査から、年齢や婚姻状況といった故人の立場、死因、葬礼のあり方、土葬か火葬かの葬法、死後の祭祀を指標にして、理想的な葬礼とそうではない葬礼の差異を明らかにする。

理想的な葬礼は、家を受け継ぐ子孫がいて、事故死や自死など異常ではない死を迎えた場合で、当人が六十歳になると「祝寿」が行われる。これは当人の葬礼に使用される「寿衣」と棺が子どもたちから贈られ、葬礼の準備の儀礼でもある。この時には親の功績と祖先となる身分が承認され、子が親を扶養する立場へと転換し、死後は祖墳に土葬され、族譜にも名が記されることを、李家山鎮吉家村のある個人の祝寿の記述から明らかにする。さらに棺の構造、装飾などについても詳細に記録する。

これに対して、未成年者と未婚女性がこの立場で亡くなった場合には、祖墳には土葬されず火葬にして散骨され、族譜への記名も行われず、「死後は鬼になる」と考えられている。また、成年者が事故死や自死、他殺である場合は、祖墳以外の場所へ土葬されるか火葬にされ、さらに後継者がいない場合は族譜への記名も行われない。既婚で後継者がいても、親より先に亡くなった場合には、葬礼は質素に行う。なお、後継者がいない場合は、生前ないし死後に養子をとる、あるいは甥が後継者の役を務める方法で後継者が確保された場合には、族譜へ記名され、祖先の一員とされる。

このように葬礼のあり方、葬法、葬地、族譜への記名は、死因、年齢、性別、既婚・未婚、後継者の有無などによって異なることを二十四の個別事例から明らかにし、死者は、祖先となる者、宗族の一員であっても祖先になれない者、鬼となる者の三種に大別されるとする。こうした区別のもとで、宗族の一員は、その宗族の維持継承を担う成員の後継者を確保する責任が求められるとともに、自然な形で人生の終焉を迎えることが強く求められ、漢族の葬礼はこうした生前と死後の宗族に対する認識に支えられているとする。

第４章「葬礼と宗教的職能者」では、西寧市湟中区李家山鎮の漢族農村の葬礼における宗教者の役割分担とそれぞれの儀礼内容などを実地調査から明らかにする。葬礼には儒教、道教、チベット仏教の宗教者が関与するのが一般的で、儒教による礼儀先生は故人の生前の功績、美徳などを褒め讃え、子孫の故人に対する悲しみ、親孝行など儒教的な美徳を

表現する。陰陽先生とチベット仏教の僧侶であるアカは、それぞれが葬家に法壇を設けて経典を唱え、その読経と法事により、故人に死を自覚させ、霊魂をあの世に送る。

これら宗教者の葬礼への参加有無は、故人の条件によって判断される。それは死因、年齢、親の存命状況、後継者の経済力に拠っていることを三十四の具体事例から検証し、祖先となる死者の葬礼には三種類の宗教者全てを招請して儀礼が行われているとする。宗教者の葬礼への関与は、現在の殯葬改革では避けるべきとされているが、この地域の漢族農村の葬礼では、宗教的職能者が欠かせない存在であることを明らかにする。

第５章「青海省の漢民族の婚礼」では、西寧市湟中区李家山鎮での漢族の婚礼習俗に関する実地調査から、婚礼の手順に従って諸儀礼を記し、さらに婚礼と葬礼の担い手と関与者の対比を行うことで、その社会的関係を明らかにする。

婚礼は、婚姻の相手を定める「啓媒」「説媒」があり、「提親」によって女性宅への結婚の申し出が行われ、「浪家」「自願」「定婚」「送彩礼」を経て、「討婚」によって結婚式の日取りの決定、婚礼の運営を行う東家の構成があって結婚式を迎える。結婚式は、嫁方での祝いである「添箱」、婚家への嫁入りから始まり、結婚式翌日に新郎新婦が料理をつくって振る舞う「下厨房」までいくつもの儀礼があり、結婚式三日目以降の「認門」、新婦の里帰りである「回娘家」がある。これらについて実際の婚礼への参与と聞き書きによって明らかにする。

婚礼と葬礼の担い手は、両者とも家族、党家、親戚、荘員、職能者が

おり、いずれも父系の党家で構成される東家が運営し、新郎・新婦の身分の検分には母方の親族が「骨主」として関与する。嫁である女性の母親の実家が骨主となり、結婚相手の男性とその家族状況を検分する。新郎側でも、新郎の父の兄弟が新婦の人柄や親への孝行などを検分しており、骨主の存在は婚礼にも重要な役割を果たしていることを明らかにする。

第6章「葬礼と喪服」では、第1章から第4章までの漢族農村における葬礼調査から、葬礼時に着用される喪服の「シャオ」を分類する。さらに、それぞれの様式構成、布地及び着用期間などの比較を通して、シャオの持つ意味を検討する。

シャオの着用には、輩分と所属という二つの基準があり、これによって長輩や親戚、荘員が着用する簡素なシャオと、故人の妻、晩輩としての子孫や甥などが着用する「重孝」とがある。「重孝」は最も複雑で厳重な様式とされるが、この様式には、直系の子孫、晩輩という世代区分、男女によって細分化された様式が見られ、こうしたシャオの実態から、長幼という世代順位と所属関係の親疎という二つ基準による社会秩序が確認できるとする。

着用から読み取れるシャオの意味としては、①故人への弔意、②葬礼への賛意、③死霊との接触という三つがある。弔意はシャオの基本的意味であり、また、遺族のシャオの着用は、故人の身分と正当な死の確認であり、その葬礼への賛意を表出している。また、シャオは、故人の霊魂や祖先霊の存在する場に接する際に着用し、その場での祭祀完了後には脱いでおり、シャオ着用は死霊との接触である祭祀を象徴するとする。

第７章「葬礼と贈答習俗－「寿礼」と「香奠」」では、第１章から第４章に記した葬礼調査から贈答品の「寿礼」と「香奠」に着目し、ここに反映されている家々の社会関係を検討する。漢族農村の葬礼における贈与には、金銭、食べ物、その他という物質的贈与と、党家による東家としての労力提供という非物質的贈与がある。これら物質的贈与と非物質的贈与の内容と差は、葬家と葬礼参加者との社会的な距離を視覚的に表現している。村落の荘員間での贈答では、基本的にそれぞれが対等とする原理が働いているが、婚姻による姻戚との贈答には、対等の原理は存在せず、上位と下位の関係がある。この関係は贈答の内容・数量からも確認することができ、葬礼の場には異なる二つの論理が存在するとする。

論文審査の結果の要旨

李生智の学位申請論文「中国青海省の漢民族の葬礼をめぐる民俗学的研究」は、論文標題とその内容の要旨からわかるように、中国青海省の省都西寧市に含まれる湟中区（湟中県）李家山鎮のいくつかの漢族農村における葬礼について、民俗学の視点と方法から現在の実態を明らかにすることを第一の目的とする。その上で、いくつかの課題を設けて論述を行ったものである。

民俗学の視点と方法というのは、現在、実際に行われている葬礼について、その儀礼の手順と内容、これらを行う人々の関与のあり方、組織体制などに焦点を当てるということと、葬礼の現場に立ち会っての参与調査と地元の方々からの聞き書き調査という方法をとるということである。日本の民俗学が長年にわたって培い、確立してきたこの視点と方法による漢族農村における葬礼の現状叙述は、きわめて精緻な内容となっている。その把握と記述は、調査研究地域が当人の出身地に近く、理解しやすかったということもあるが、現在、中国民俗学界でも一般化しつつある田野調査(実地調査)に基づく研究に比しても群を抜く内容となっていると評価できる。

いくつか具体的にあげると、第１章「青海省の漢民族の葬礼と関与者」では、湟中区李家山鎮新添堡村のある故人の葬礼に立ち会っての参与調査と聞き書きから、葬礼の準備ともいえる生前六十歳時に行われる祝寿、死亡時から始まる葬礼準備と四日間にわたる葬礼の手順と各儀礼内容、

五日目の祖墳への埋葬（土葬）、埋葬後の死者祭祀を詳細に、写真や図も含めて叙述している。それだけでなく、葬礼の実施者と関与者を明確にするという目的のもと、葬家の宗族である東家の役割分担、同じ集落内に住む荘員から選ばれる喪主の役割、礼儀先生、陰陽先生、チベット仏教の僧侶であるアカという三種の宗教者それぞれの役割と、葬礼儀礼に用いられる礼儀先生による対聯、陰陽先生による大紙や、礼儀先生による「招魂文」の文面、死者霊と先祖霊を招く「請亡」の隊列と儀礼内容なども詳しく記している。

第２章「村落と党家と葬礼」では、湟中区李家山鎮河湾村の河湾集落における李氏一族の宗族について、七十三戸の李姓家の「門」形成を明確にした上で、ある故人の実際の葬礼における家族、血縁の党家、結盟による党家から構成される葬礼実務を行う東家などについて、家系図も作成して明らかにしている。また、この論文で従来の研究に比して詳細な内容となっているのが、第３章「理想的な葬礼と三種類の死者」で行う二十四例もの具体例をあげての検討である。故人の年齢、婚姻、後継者の有無、死因などを指標にして土葬か火葬かという葬法、土葬の場合には祖墳かそれ以外の場所か、族譜への記名有無の区別を分析している。とくに事故死や自死、他殺など通常とは異なる死者の葬礼や葬法、族譜への記名は、情報の把握が困難であり、この論文では特記される調査成果といえる。

同様な成果としては、祖先と位置づけられるかどうかという死者の立場、年齢、結婚、死因を含めて三十四例の葬礼における葬法と埋葬場所、

さらに礼儀先生、陰陽先生、アカの三種の宗教者がそれぞれどのように招請されたのか、その人数も含めての記述があげられる。また、第5章「青海省の漢民族の婚礼」では、ある特定夫妻の婚姻儀礼について、参与調査の成果として順を追って具体的に叙述することに加え、一九五〇年代から十年単位で二〇二〇年代まで、結婚相手の決定、自宅か式場（酒店）かの結婚式の場、儀礼での媒人の有無などについて、李家山鎮河湾村の李氏一族全体の動向を明らかにしている。第6章の「葬礼と喪服」においても、葬礼への参列者、関与者など全体にわたって、喪服であるシャオについて、素材・着装など詳細に記述している。

以上のような調査研究の成果に基づいて、本論文では葬礼における荘員に依頼する喪主、東家となる党家、姻戚関係に基づく上位、平等、下位といった親戚の序列、上位親戚が務める「骨主」など、葬礼の当事者や関与者の役割と位置づけについて、婚姻習俗との対比も行っている。これは研究課題として積極的に深化をはかろうとする意欲の表れとして評価できる。

本論文にはこうした優れた内容と評価できる姿勢があるが、一方では、先行研究の検討が数少なく、しかも平板で乏しい。その結果が「骨主」の位置づけなどの論述が不正確であり、深まっていない。また、論文の最初に提示した本論文の研究目的にあげている死生観や霊魂観に関する論述が乏しい。さらに葬礼のなかで行われる諸儀礼の意味付けについても行われていないといえる。今後の課題の提示という研究展望も不十分である。

このようないくつもの課題があるが、本論文は民俗学の視点と方法によって青海省の漢族農村における葬礼研究として緻密な実地調査とその成果の叙述が実現されている。なおかつ日本語論文としての精確さも備えている。よって本論文の提出者である李生智は、博士（民俗学）の学位が授与される資格があると認められる。

令和 6 年 2 月 15 日

主査　國學院大學大学院客員教授　小川　直之　㊞

副査　國學院大學教授　伊藤　龍平　㊞

副査　國學院大學准教授　服部　比呂美　㊞

副査　東京都立大学・首都大学東京名誉教授　渡邊　欣雄　㊞